立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０２０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　英米文学専攻		
研究代表者（2021年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名	
	☑博士前期課程　2年 ☐博士後期課程　年 （学生番号：　19JB004P　）	渡部美優貴　印	
指導教員	所属部局・職	氏　名	
	文学研究科・准教授	古井義昭　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	Edgar Allan Poe 作品における演劇性		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2021年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名	
	文学研究科英米文学専攻前期課程 2年	渡部美優貴	
研究期間	２０２０　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）　200,000円　／（採択金額）　200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、Edgar Allan Poe 作品に見られる 19 世紀アメリカの大衆文化に焦点を当て、Poe 作品における演劇性を明らかにするものである。当時、人気を博した演劇やフリーク・ショーを補助線に Poe の短編を分析すると、“The Fall of the House of Usher”は、舞台の様相を呈した演劇的な言葉で構成され、“The Black Cat”は作品中にフリーク・ショーの要素を持つことが顕著に見て取れる。また、Poe の母が著名な女優であったことからも、演劇は Poe 作品に大きく影響していると考えられる。「演劇」、「フリーク・ショー」、「女優のパフォーマンス」といった観点から、Poe 作品の新たな解釈を目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　Edgar Allan Poe　〕〔　演劇　〕〔フリーク・ショー　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究の目的は、Edgar Allan Poe 作品における演劇性を論じることである。まず、Poe が「演劇」の要素を作品に取り入れたことを裏付けるために Poe と演劇の関係性を明らかにした。Poe の母親は俳優の家系に生まれ育った著名な女優であり、父親もアマチュア劇団出身の俳優であった。彼自身も学生時代にアマチュア劇団を立ち上げた経験を持ち、1835 年に、未完の作ながら *Politian* という戯曲を手がけている。また、Poe は *Evening Mirror, American Whig Review, Broadway Journal* 等に多くの劇評を執筆している。そして、Poe の研究者である Burton R. Pollin は、Poe は Shakespeare の著作から、大きく影響を受けたことを指摘している。このように、Poe と演劇には深い繋がりがあり、その作品にも演劇的影響が表れるのは必然であると考えられる。

上記のような Poe の演劇的バックグラウンドを念頭に置き、彼の代表的な短編 “The Fall of the House of Usher”(1839)の演劇性について分析した。“The Fall of the House of Usher” の演劇的要素はそのタイトルにも如実に示されており、タイトルにしてすでに演劇にちなんだ語彙で構成されている点は本研究計画提出時に、指摘した通りである。さらに作品で描かれる風景描写を、19 世紀アメリカにおける舞台美術の様式に即して分析し、本作品が持つ視覚的演劇性を明らかにした。そして作中に組み込まれた Roderick のバラッド形式の詩を「劇中劇」と仮定し、考察を行った。Poe はバラッドを劇中劇として利用することで、二つの距離を表現している。一つは、「登場人物とバラッド（劇中劇）の距離」であり、もう一つは「読者とバラッドの持つヴィジョン（劇中劇）を見ている登場人物との距離」である。「登場人物とバラッドの距離」は、登場人物とバラッドが舞台と観客の距離を作り出している。そして、「読者とバラッドのヴィジョンを見ている登場人物との距離」は、「登場人物とバラッドの距離」を見る読者との距離が、舞台と観客との距離となっている。要するに Poe は、バラッドを「舞台」に見立て、メタ的な手法を利用しているのである。以上のことから、作中に描かれるバラッドにより、本作品が立体的な構造を持つことが明らかになった。また、Roderick の声の詳細な描写は、観客の聴覚に訴えるという演劇の特徴の一つを持ち合わせている。以上より、この物語には観客の目に訴える視覚的効果、耳に訴える聴覚的効果という二つの演劇的手法が含まれていることがわかる。本作品のクライマックスでは、登場人物の死よりも館の崩壊が壮大に描かれていることから、当時のスペクタクル劇の様相を呈していると考えられ、Poe は演劇の要素を巧みに作品に取り入れていたといえる。

次に“The Black Cat”(1843)におけるフリーク・ショーの要素について考察を行なった。本作品もまた、エンターテインメント的な要素を持った作品であるが、その描写は、“The Fall of the House of Usher” とは異なり、独白劇によって、語り手の倒錯した内面を暗示する。背景、衣装、色、照明等を連想させる描写は一切なく、語り手はただ、自身の所業や想念について語り続けるだけである。しかし、巨大な猫の影が映し出された壁に人々が押し寄せる場面から見て取れるように、その中には、珍奇なものに人が集まるといった、P. T. Barnum が行っていたフリーク・ショーの要素が散見される。そこで、Poe は Barnum のフリーク・ショーの影響を受けているという仮説を立て、その実証を試みた。Poe の短編 “Some Words with a Mummy” は 1845 年の作であるが、Barnum はその 3 年前に、New York の Barnum Museum において、Fiji Mermaid と呼ばれる子猿と魚のミイラの上半身と下半身をそれぞれ縫い合わせた、偽りの人魚のミイラの展示を行った。Poe と Barnum が同時期に、死の具現であるミイラを、エンターテインメントの素材として扱ったことは、単なる偶然とは言い切れない同時代性を示しており、この二つのミイラは Poe 作品と 19 世紀の大衆文化との親縁性をほのめかしていると考えられる。アメリカのノンフィクション作家である Irving Wallace は、Barnum の伝記の中で、Poe と Barnum の結節点として Johann Nepomuk Maelzel という人物をあげている。Poe は Maelzel のショー “Chess-Player”に触発され、“Maelzel’s Chess-Player”(1836)を執筆し、Barnum は Maelzel からメディアの利用法や、ショーマンとしての心得などを学んでいる。また、Poe と Barnum は自己演出に長けていたという点においても共通していた。

研究成果の概要（つづき）

“The Black Cat”で描かれる警察官が壁に埋められた死体に驚愕するシーンは、フリーク・ショーで奇異なものを見た観客のリアクションに酷似している。Poe の他の作品と比較した時に、“Hop-Frog”の物語の構成は、弱者が強者に復讐を果たし見世物にするという点でフリーク・ショー的要素を描いたものであると考えられ、“Some Words with a Mummy”で描かれたミイラもまた、見世物として存在している。このように、Poe は様々な作品の中でフリーク・ショーを描いている。演劇とフリーク・ショーは異なるジャンルのものとされているが、フリーク・ショーは見世物にプロットを与えるという点で演劇的であるといえるだろう。

続いて、Poe 作品における女性キャラクターのパフォーマンスについて分析を行なった。演劇において特に主要な要素は「パフォーマンス」である。Poe の朗読の才能は、母親から譲り受けたものであることを周囲が認識していたことからも、「女優」の存在は、Poe の創造性を刺激したことは間違いない。1846 年 6 月の *Godey's Lady'sBook* に掲載された Poe の Anna Cora Mowatt（作家・詩人・女優）に関する記事からは、Poe が女性のパフォーマンスを特別な視点で見ていたことが示唆されている。演劇性が備わっていると認められるポー作品には、女性ジェンダーの時代的通念が投影され、演じるのと類似した効果が散見される。本研究で取り上げた女性キャラクターたちが提示する女性像は、通念化した美しい女性性を再現する一方で、男性の領分を侵し、圧倒する性質をも有している。女性のパフォーマンス という観点から “The Fall of the House of Usher,” “The Spectacles,” (1844) “Hop-Frog” (1849) を分析した。Poe 作品には「死から甦る美女」というモチーフがよく描かれる。しかし、Madeline の描写は、Poe が描く他の女性描写とは異なる。Madeline は強硬症だったため、仮死状態にあり、誤って埋葬されてしまうが、同様のエピソードが“Berenice” (1835)でも使われている。女性が生き埋めにされるというシチュエーションは、さまざまな制限を強いられた当時の女性のメタファーとして見ることができる。Berenice は自身で墓から出てくることはなかったが、Madeline は自身で土の中から這いあがり、Roderick のもとにやってくる。当時のアメリカでは、女性は「家庭」という閉ざされた領域の中にいた。Madeline が Roderick に覆い被さるパフォーマンスは、閉鎖的な領域から飛び出し、男性の領域に入り込む女性を表したものであると考えられる。“The Spectacles”では、Madame Lalande の持つ視線を利用することによって男女の通念を逆転させている。この物語では、「女性から男性を凝視する行為は大胆な振る舞いであり、不快なもの」と定義されている。しかし、女性である Madame Lalande は、男性である Simpson に見られていたのではなく、彼女が Simpson を観察していたことがわかる。そして Madame Lalande の視点から見た Simpson の見え方によって、彼の処遇は女性である Madame Lalande によって決定されている。つまり、「見る男性と見られる女性」という男女の通念が逆転して描かれている。そして、“Hop-Frog” の Trippetta は、女性性を故意にパフォーマンスすることにより、Hop-Frog の復讐を援護した。Poe は、ジェンダーが「演技である」ということを認識していたからこそ、このようなキャラクターを描くことができたのではないだろうか。変幻自在のジェンダーを利用した Poe の表現戦略が、これらの作品に表れていると考える。

結論として、Poe の演劇性の一つとして考えられるのは、視覚的作用である。演劇では、舞台の視覚的要素が観客の目に訴え、俳優の声が観客の耳に訴える。演劇における観客にとっての利点は、舞台の迫力を生で体感可能にすることである。しかし、Poe は文章を書く作家であるが故に、文学の中で舞台を作りあげようとしていたのではないだろうか。“The Fall of the House of Usher”の描写からもわかるように、Poe の文体は読者にわかりやすい視覚的作用を与えていることは明らかである。

Poe が執筆した唯一の戯曲 *Politian* は、N. Bryllion Fagin をはじめとする多くの Poe の研究者によって、失敗作として議論されてきた。しかし、Jeffrey H. Richards は、この作品は、再検討に値するものであると主張する。Poe 作品の演劇性をさらに追求することで、作品の新たな解釈を導き出し、Poe 研究をさらに発展可能なものにすると考える。

を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

※ ホームページ等で公表します。（様式３）

立教ＳＦＲ－院生－報告

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）

③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）

④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文

(1)渡部美優貴、「パフォームされる女性性—女性描写から見るエドガー・アラン・ポー作品におけるフェミニズム」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』、第 22 号、2021 年 4 月発行予定。

②該当なし

③該当なし

④学会発表

(1) 2020 年度第 3 回研究方法論 2、2020 年 12 月 9 日、「Edgar Allan Poe 作品における演劇性」於オンライン。